

# 幼児の主体性を育む保育方法に関する探索的研究 ーコーナー保育を通じた人とのかかわる力の育ちに着目してー

An Exploratory Study on the Method of the Early Childhood Care and Education  
to Nurture Independence of Preschoolers  
- With a Focus on Abilities Which Preschoolers Keep Good Relationships with Others  
through Corner Plays -

田 辺 昌 吾  
Shogo TANABE

「幼児の環境との主体的なかかわりを大切にした教育」「自由感あふれる教育」を具体化した保育方法の1つであるコーナー保育を導入し、その実践を徐々に進めてきたA認定こども園を対象として、コーナー保育を通じた幼児の人とのかかわる力の育ちについて検討を行った。その結果、クラスの中での居場所感や自ら行動する力については、保育者はその育ちを高く認識していた。一方、他者との相互的なコミュニケーションと他者理解については、幼児の年齢による認識の差が認められ（4、5歳児の育ちを高く認識）、また、道徳性の芽生えや規範意識の芽生えについては、幼児の年齢に関わらず、それほど高くは認識していなかった。以上の結果より、幼児の主体性を育む保育方法について、コーナー保育は一定程度の効果のある可能性が示されたが、同時に、その保育方法をただ実践するだけですべての育ち（本研究では道徳性の芽生えや規範意識の芽生えなど）が保障されるわけではないということも示唆された。

キーワード：保育方法、コーナー保育、人とのかかわる力の育ち、領域「人間関係」

## I. はじめに

2015年4月に施行される子ども・子育て支援新制度の開始を前に、改めて保育の質や遊びの質、保育者の専門性について活発な議論が展開されている<sup>1)2)3)4)</sup>。そのなかで大豆生田(2014)<sup>2)</sup>は、倉橋惣三の理論を援用しながら「時代や社会が変わることでそれに合わせていく『新』の側面があると同時に、時代や社会が変化しても変えることができない『真』の側面がある」(p.41)とし、保育における「真」の中核として遊びの重要性を指摘している。幼稚園教育要領<sup>5)</sup>では、環境を通して行う教育が幼稚園教育の基本とされ、「幼児期にふさわしい生活の展開」「遊びを通しての総合的な指導」「一人一人の発達の特性に応じた指導」が特に重視されている。このことは保育所保育指針<sup>6)</sup>、幼保連携型認定こども園教育・保育要領<sup>7)</sup>にも同様にあてはまる。

しかし一方で、「実際の保育現場では、残念ながら、旧来の『学校教育』のように系統的に教える『教育』に重点を置いた園や、小学校以上の教育内容を取り入れている園も少なくありません。また、遊びが大事と言いつつ、保育者が強引に子どもの遊びを引っ張り子どもの自発

性がほとんど考慮されていない実践や、反対に保育者が子どもや遊びにほとんどかかわらない、あるいは、遊びを創っていくための物的資源や環境への配慮が行き届いていないにもかかわらず、『最近の子どもたちは遊べなくなった』と子どもの姿を否定的に捉えていることもないとは言えません<sup>8)</sup> (pp.17-18) という指摘もあり、幼児期にふさわしい生活や遊びを通した総合的な指導についてさまざまな解釈があり、その解釈に基づきさまざまな保育実践が行われている現状がある。

では、環境を通した教育を基本とし、「幼児期にふさわしい生活の展開」「遊びを通しての総合的な指導」「一人一人の発達の特性に応じた指導」を中核に据え、幼児の健やかな成長を保証する実践とはどのようなものであろうか。このことを考えるにあたり、本稿では、これまでの実践を振り返り、新たな方法での保育に取り組んでいるA認定こども園（私立園、以下A園とする）の保育実践に着目し、検討することとする。

## Ⅱ. A園の取り組み<sup>注(1)</sup>と研究的視点

環境を通して行う教育について、幼稚園教育要領解説<sup>5)</sup>では、「遊具や用具、素材だけを配置して、後は幼児の動くままに任せるといったものとは本質的に異なるものである。もとより、環境に含まれている教育的価値を教師が取り出して直接幼児に押し付けたり、詰め込んだりするものでもない。環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしいかかわり方を身に付けていくことを意図した教育である。それは同時に、幼児の環境との主体的なかかわりを大切にした教育であるから、幼児の視点から見ると、自由感あふれる教育であるといえる」(pp.27-28)とされる。A園ではこの「幼児の環境との主体的なかかわりを大切にした教育」「自由感あふれる教育」をより重視し、それを具体化する1つの方法としてコーナー保育に着目し、取り組みが進められている。コーナー保育とは、「保育者がある活動を意図したり予想したりしながら、その活動に適した場所に、必要とされる道具や材料などの設定を行い、子どもの生活や遊びの拠点となるよう構成した空間がコーナーである。こうしたコーナーを数か所設けて行う保育をコーナー保育と呼ぶことがある。製作コーナー、ままごとコーナーなどさまざまなコーナーが考えられるが、いずれも環境によって子どもに働きかけていく重要性を認識し、また子どもがみずから活動を選択し取り組んでいくことを大切に考えているところにその意義がある<sup>9)</sup>」と説明されている。

A園ではここ数年、よりよい保育を探究し、園内外の研修や他園の保育参観などを通して、自園の保育の振り返りが行われてきた。そのなかで、子どもの主体性を重視し、幼児期にふさわしい環境を通した教育を実践する方法として「コーナー保育」に着目し、2014年度の1年間をかけて徐々に取り組みが進められてきた。A園ではこれまでは保育者の提案する遊びをクラスで一斉に取り組むことを主として保育が展開されていた。しかし、子どもが自ら考え、主体的に生活することをこれまで以上に重視した保育の必要性を感じ、園長を中心として保育者間で議論を重ね、新たな保育方法への転換が徐々に進められてきた<sup>注(2)</sup>。

では、新たな方法での保育を通して、幼児の育ちに変化はあったのであろうか。幼児の主体性を重視した保育によって、本当に幼児の主体性は育まれているのであろうか。このことを、

保育のあり方を見つめなおし、新たな取り組みの過渡期にあるA園の実践から検討することで、幼児の主体性を育む保育方法について、何らかの示唆が得られるものと考えられる。幼児の主体性について、特に本稿では、人とのかかわる力の育ちに着目して検討したい。それは、2008年に改訂された幼稚園教育要領では、領域「人間関係」が本改訂の柱の1つとされ、現代の子どもたちが人とのかかわりにおいて多くの困難をかかえているという社会状況を考慮すると、幼児の集団生活の場である幼稚園や保育所などの役割が、以前にもまして重要になってきている<sup>10)</sup> という指摘による。また、2010年に報告された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」<sup>11)</sup> では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿」として12の柱立てがされており、「自立心」「協同性」「道徳性の芽生え」「規範意識の芽生え」「いろいろな人とのかかわり」といった主体的な人間関係を形成することによって培われる育ちが示されている。これらより、幼児の主体性の育ちについて、主体的な人間関係の育ちに焦点化して検討することは重要性が高いと言える。

以上より、本稿では、「幼児の環境との主体的なかかわりを大切にした教育」「自由感あふれる教育」を具体化した保育方法の1つであるコーナー保育を導入し、徐々に保育の中心にしつつあるA園を対象として、幼児の主体性、特に主体的な人間関係の育ちに焦点化して、幼児の主体性を育む保育方法について検討することとする。なお、1つの園の取り組みであり、その取り組みも改革の途上であることから、本研究を通して幼児の主体性を育む保育方法を実証するというよりも、その可能性を探索することを目的とする。

### Ⅲ. 方法

#### (1) 調査対象者とデータ収集の手続き

調査は、A認定こども園に勤務する保育者を対象に質問紙法により実施した。2015年3月に1年間の保育の振り返りという位置づけで実施した。調査実施にあたり、研究の趣旨、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、調査対象者が特定されない形で結果を公表することなどを園長に説明し同意を得た。また各保育者へは同様の内容を調査票に添付し了解を得た。調査票の配布・回収は園長を通して行い、調査票回収後、回答内容を補うために保育者を対象に1時間程度の聞き取りの場を設けた。

#### (2) 調査内容

幼稚園教育要領の領域「人間関係」のねらいおよび内容、同解説を参照し、幼児の人とかかわる力の育ちを測定する項目(15項目)を作成した(図1参照)。本稿では、A園でのコーナー保育という新たな保育方法への取り組みによる幼児の育ちの変化について把握するため、例えば「一人一人がクラスの中で居場所感を感じる」という内容について、コーナー保育を実践することによって、クラス子どもたち全体的に「5.かなり増えた(高まった)」から「1.かなり減った(低まった)」の5件法での回答を求めた。

また、人間関係に関する内容に限らず、コーナー保育を実践して感じる「良いと思う点」「難しいと思う点」について、自由記述形式で回答を求めた。さらに属性項目として、保育者とし

での経験年数、今年度の担当学年・職務、前年度までの今年度担当学年の担当経験の有無について回答を求めた。

#### Ⅳ. 結果と考察

##### (1) 回答者の属性

質問紙調査の結果、13名の保育者から回答が得られた。回答者の属性を表1に示す。今年度の担当学年を前年度までに経験したことがあるかどうかについて、13名中10名に経験があり、コーナー保育を通した幼児の育ちについて、コーナー保育に取り組む以前の幼児の姿と比較できる視点が一定程度備わった保育者からの回答が得られたと考えられる。また、同一学年の担当経験のない3名の保育者に関しても、A園のコーナー保育への取り組みは年度当初から完全実施されたわけではなく、1年間を通して徐々に取り組みが進められていったことから、コーナー保育を通した幼児の育ちについてある程度評価できるものと考えられる。

表1 回答者の属性

| ID | 保育者としての<br>経験年数 | 担当学年 | 職 務 | 同一学年の<br>経験の有無 |
|----|-----------------|------|-----|----------------|
| A  | 32              | 2    | 担 任 | あ り            |
| B  | 12              | 3    | 担 任 | あ り            |
| C  | 6               | 3    | 担 任 | な し            |
| D  | 11              | 3    | 担 任 | あ り            |
| E  | 9               | 3    | フリー | あ り            |
| F  | 4               | 3    | フリー | あ り            |
| G  | 1               | 4    | 担 任 | な し            |
| H  | 4               | 4    | 担 任 | な し            |
| I  | 17              | 4    | 担 任 | あ り            |
| J  | 15              | 4    | 副担任 | あ り            |
| K  | 13              | 5    | 担 任 | あ り            |
| L  | 10              | 5    | 担 任 | あ り            |
| M  | 3               | 5    | 担 任 | あ り            |

##### (2) コーナー保育を通した人とかかわる力の育ち

15項目について、コーナー保育を実践することによってどのような変化があったのかについての回答結果を図1に示す。A園にとっての新たな取り組みであるコーナー保育について、先述したようにコーナー保育に取り組む以前の幼児の姿と比較する視点が一定程度備わった保育者の回答ではあるものの、コーナー保育を通した育ちなのか、コーナー保育を実践していなかったとしても年齢に応じて育ったものなのか、厳密に線引きすることは難しいと考えられる。また、新たな取り組みであるがためにその効果を肯定的に評価する傾向が予想され、それらのことを勘案して結果を読み取る必要があるが、コーナー保育を通した人とかかわる力の育ちは多

くの項目で高く認識されているという結果であった。「かなり減った（低まった）」という回答はまったくなく、「やや減った（低まった）」という回答も2項目で1名ずつの回答があったのみであった。以下、4つの視点から、コーナー保育を通した幼児の人とかかわる力の育ちについて論じる。

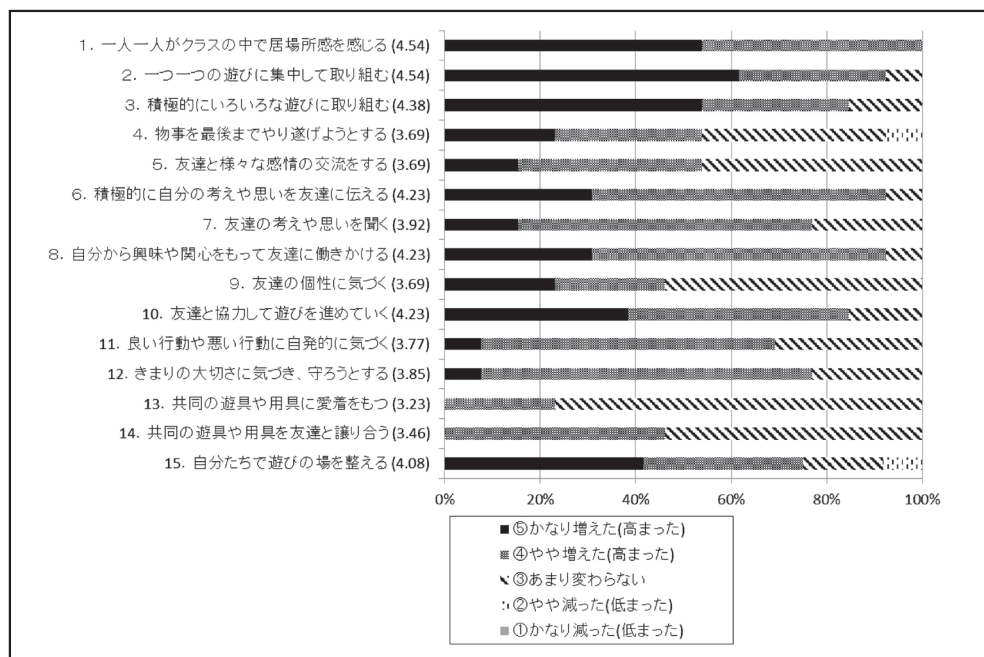


図1 コーナー保育を通した人とのかかわる力の育ち（回答割合）  
（各項目文末尾の括弧内数値は平均値を表す）

### ①クラスの中での居場所感

まず、「一人一人がクラスの中で居場所感を感じる」に注目したい。すべての保育者がコーナー保育を通して「高まった（かなり＋やや）」と感じており、一定程度の効果のある可能性が示された。本項目は、教育要領の領域「人間関係」の内容「（１）先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう」とその解説をもとに作成した項目である。解説<sup>5)</sup>には「幼児にとって幼稚園生活は、初めての集団生活の場である。幼児は、そこで自分を温かく受け入れてくれる教師との信頼関係を基盤に自分の居場所を確保し、安心感をもってやりたいことに取り組むようになる」（p.91）と記されている。安齊（2003）<sup>12)</sup>は、「居場所」という言葉が使われるときには相反する2つの方向性を見出すことができるとし、「1つは、自分の自己像を修正し自立していく場としての『居場所』であり、その先にはいきいきと自己発揮することが予測されている前向きな『居場所』である」（p.35）とし、「もう1つは、逃げ場としての『居場所』であり、居られない場から逃げ出し立ち止まって心の安定を図る場としての『居場所』である」（p.35）としている。教育要領解説で記されている「居場所」は前者の「居場所」を意味していると考

えられ、本研究での「居場所」も主として前者の「居場所」、すなわち「自立していく場としての『居場所』」を意味している<sup>注(3)</sup>。

この幼児の居場所感がコーナー保育を通して高まったという結果について、2つの視点からその理由について考察する。1つは、コーナー保育における保育者の個別的なかわりの増加についてである。コーナー保育を実践して感じる「良いと思う点」の回答結果には、「その子のペースでできるので、一人一人に合った支援ができる（4歳）」「一人一人の遊びの様子を見ながら声掛けしたり、困っていると提案したりが個別にできる（4歳）」「それぞれの子どもの要望にも丁寧に答えてあげられる（5歳）」「一人一人が何が好きかが分かるし、声を細めに掛けられる（5歳）」「コーナーを発展させていくうえで、子どもの声を聞いたり、お友達との関わりを知ろうとすることで、個々の子どものことをより良く知ることができるようになった（3歳）」「子どもの個性を見つけやすくなった（3歳）」といった、幼児個々へのかかわりができる良さや個別的なかわりを通した幼児理解の深まりについての回答があげられた。保育者が幼児一人一人とこれまで以上の密なかわりができ、保育者－幼児間の信頼関係が確実に築かれ、そのことが幼児一人一人のクラスでの居場所感の高まりの基盤となったのではないだろうか。

その一方で、コーナー保育を実践して感じる「難しいと思う点」には次のような回答がみられた。「一人一人が何をしているか、きちんと観察し成長を促すのが難しい（2歳）」「子どもとのかかわりが偏りがちなときがある（3歳）」「その時々の子どもの育ちを考慮して、遊びの発展をどのようにサポートしていくかということ、また一人一人の子どもの育ちの（特に苦手分野の）把握（3歳）」「子どもによって姿が違うので、それぞれに合った保育を展開すること（4歳）」「一人一人の気持ちを知り、寄り添う時間をもたなければならない（5歳）」といった、幼児への個別的なかわりのできることがコーナー保育の良さであると感じているからこそ、そのことを活かした保育の展開に難しさを感じている回答があげられ、悩む保育者の姿がうかがいあがった。コーナー保育を通した幼児との個別的なかわりがコーナー保育の良さにもなり難しさにもなることが示唆され、保育の奥深さが窺われる。

幼児の居場所感がコーナー保育を通して高まったもう1つの理由については、幼児の遊びに対する主体性から考えたい。コーナー保育を実践して感じる「良いと思う点」の回答結果には、「子ども自身で遊びを選んだりして、主体的に遊べる（2歳）」「自分たちで考えて、工夫して、様々な遊びをする姿が見られるようになった（3歳）」「自分の居場所が見つけられず落ち着かない子どもにとって、自分で好きな遊びを見つけることができ、居場所が見つけられるようになった（3歳）」「自発的に『〇〇をやりたい』と言える子が増えた（3歳）」「子どもたち自ら遊びたい遊びを選び、そこから自発的に考えて発想し、遊びを展開できるようになり、のびのびと楽しんで遊び込めるようになってきた（4歳）」「やりたいことをとことん追求できる（5歳）」などがみられ、幼児が環境に働きかけ、主体的に遊ぶ姿が示されている。1つめの理由にあげた保育者との良好な関係を基盤に、幼児が園生活を主体的に送ることによって、自然とクラスの中での居場所感も高まっていくのではないだろうか。

安齊（2003）<sup>12)</sup> は、子どもにとって自分のクラスの保育室が「居場所」となるためには、

保育者や他児と良好かつ相互的な人間関係を築いていく必要性を指摘している。『居場所』は他者との関係性によって築かれるものである」(p.37)としている。それと同時に、居場所感が高まることによって他者との関係性が豊かになるという方向性も推察される。本研究の結果から、コーナー保育を通した幼児の居場所感の高まりがその後の豊かな人間関係へとつながっていく可能性が示されたと言えよう。

## ②自分の力で行動する力

領域「人間関係」の内容には、「(2) 自分で考え、自分で行動する」「(3) 自分でできることは自分です」「(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ」といった、自ら行動し継続していく力の育ちも含まれており、良好な人間関係を築いていくためには自ら行動し継続していく力が必要であると示されている。これらの内容などを参照して作成した項目が「一つ一つの遊びに集中して取り組む」「積極的にいろいろな遊びに取り組む」「物事を最後までやり遂げようとする」である。

「一つ一つの遊びに集中して取り組む」「積極的にいろいろな遊びに取り組む」といった自ら行動する力に関しては、大きな肯定的な変化があったと認識されている。先述したように、コーナー保育を通して幼児が環境に働きかけ、主体的に遊ぶ姿が多くの保育者からあげられており、主体的に遊ぶなかでは自ら行動する力が発揮されているものと考えられ、そのことが結果に表れたのではないだろうか。一方で、「物事を最後までやり遂げようとする」という自らの行動を継続していく力に関しては、育ちが小さく認識されている。先述したように、調査対象者の保育者は、コーナー保育において、幼児個々へのかかわりができる良さや個別的なかわりを通した幼児理解の深まりを実感しており、幼児のやり遂げようとする姿にもより個別的にかかわることができるようになったものと思われる。そこでは「その子なりにやり遂げた姿」をどのように理解するかが重要になってくる。教育要領解説<sup>5)</sup>には、「特に、3歳児では、大人から見ると一見やり遂げていないように見えても、幼児なりにやり遂げたと思っていることもある」(p.94)とされており、保育者一人一人が幼児のどのような姿を「やり遂げた姿」として認めるかによって、幼児の育ちの評価も変わってくると思われる。「物事を最後までやり遂げようとする」という質問項目に対する回答を、2、3歳児担当保育者(6名)と4、5歳児担当保育者(7名)で分けて平均値を算出すると、2、3歳児は3.33、4、5歳児は4.00と2、3歳児担当保育者において特に低く認識されていた。このことから、特に低年齢児担当保育者が「その子なりにやり遂げた姿」をどのように認めるべきか試行錯誤していることが推察され、それが結果に表れたのではないだろうか。

## ③他者との相互的なコミュニケーションと他者理解

他者との相互的なコミュニケーションを通して、感情の交流を経験したり、他者理解が深まったりする内容として、領域「人間関係」の内容では、「(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」「(5) 友達と積極的にのかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う」「(7) 友達のよさに気付く、一緒に活動する楽しさを味わう」などがあげられている。

これらの内容を参照して作成した項目が「積極的に自分の考えや思いを友達に伝える」「友達の考えや思いを聞く」「友達と様々な感情の交流をする」「友達の個性に気づく」である。

相互的なコミュニケーションについては、自分のことを伝える力（「積極的に自分の考えや思いを友達に伝える」）は一定程度の育ちが認識されているが、それに比べて、相手のことを聞く力（「友達の考えや思いを聞く」）は育ちが小さく認識されている。また、相互的なコミュニケーションを通じた感情の交流（「友達と様々な感情の交流をする」）や他者理解（「友達の個性に気づく」）については、約半数の保育者が「（以前と）あまり変わらない」と回答している。友達の考えや思いを聞いたり、友達と様々な感情の交流をしたり、友達の個性に気づいたりすることは、友達との関係がより深まったときに可能となることと考えられる。次の④で取り上げる道徳性や規範意識の芽生えも同じように考えられるが、友達との関係がより深まったときに経験され、培われていく力については、幼児の発達段階を考慮に入れる必要がある。「友達の考えや思いを聞く」「友達と様々な感情の交流をする」「友達の個性に気づく」の回答結果を2、3歳児担当保育者（6名）と4、5歳児担当保育者（7名）で分けて平均値を算出すると、それぞれ2、3歳／4、5歳の順に、3.50／4.29、3.50／3.86、3.33／4.00と4、5歳児担当保育者は一定程度の育ちを認識していた。すなわち、友達関係がより豊かになる4、5歳児においては、コーナー保育を通して、相互的なコミュニケーションや感情の交流、他者理解の促進が果たされる可能性が示された。

#### ④道徳性の芽生え、規範意識の芽生え

道徳性の芽生えや規範意識の芽生えとして、領域「人間関係」の内容には、「(9) よいことや悪いことがあることに気づき、考えながら行動する」「(11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気づき、守ろうとする」「(12) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う」などがあげられている。これらの内容を参照して作成した項目が「良い行動や悪い行動に自発的に気づく」「きまりの大切さに気づき、守ろうとする」「共同の遊具や用具に愛着をもつ」「共同の遊具や用具を友達と譲り合う」である。

これらの項目は、多少のばらつきはあるものの、全体的な結果と比べるとそれほど大きな育ちがあったとは認識されていない。幼児の発達段階を考慮に入れ、2、3歳児担当保育者（6名）と4、5歳児担当保育者（7名）で分けて平均値を算出したが、それぞれ2、3歳／4、5歳の順に、3.83／3.86、3.33／3.14、3.33／3.57、3.67／3.86と、年齢が上がってもそれほど大きな育ちは認識されていない。道徳性や規範意識の芽生えは基礎的な人とかかわる力の育ちがあって、その上で友達との関係がより深まったときに経験され、培われていくものと考えられる。コーナー保育を通して、道徳性や規範意識の芽生えを培おうとするならば、その内容を学年の教育目標などに定めた上で、詳細な検討を重ねた環境構成が必要になると思われる。手探り状態で進められてきたA園のコーナー保育の効果としては、現段階では十分に認識されていなかったが、今後も継続して調査し、コーナー保育を通して、道徳性や規範意識の芽生えが培われるのかどうかについて検討していきたい。

## V. まとめと今後の課題

本稿では、1年間をかけて徐々にコーナー保育の取り組みを進めてきたA園の保育実践に焦点をあて、コーナー保育を通した幼児の人とかかわる力の育ちについて検討を行った。その結果、クラスの中での居場所感や自ら行動する力については、保育者はその育ちを高く認識していた。一方、他者との相互的なコミュニケーションと他者理解については、幼児の年齢による認識の差が認められ（4、5歳児の育ちを高く認識）、また、道徳性の芽生えや規範意識の芽生えについては、幼児の年齢に関わらず、それほど高くは認識していなかった。

以上の結果より、幼児の主体性を育む保育方法について、コーナー保育は一定程度の効果のある可能性が示されたが、それと同時に、その保育方法をただ実践するだけではすべての育ち（本研究では道徳性の芽生えや規範意識の芽生えなど）が保障されるわけではないということも示唆された。それは、保育者の自由記述の回答結果から読み取れた、コーナー保育における幼児との個別的なかわりがコーナー保育の良さにもなり難しさにもなる、ということからも示されている。

これらを踏まえ、今後の課題としては、単にコーナー保育という保育方法を実践したことによる幼児の育ちについて検討するのではなく、コーナー保育をすすめていく上で、コーナー保育と学年の教育目標がどのように関連し、それに応じてどのように環境構成をすればいいのかといった、全体的な保育実践のなかでのコーナー保育の在り方について検討する必要性があげられる。また、小川（2010）<sup>13)</sup>は、保育室のコーナー環境では製作コーナーを「ベースキャンプ」とし、保育者と幼児一人一人が「見る⇔見られる」関係となるよう各コーナーの環境を構成する必要性を指摘しており、こういった、コーナー保育の具体的な中身の検討と合わせて、幼児の育ちについて検討する必要性もある。本研究の対象としたA園でのコーナー保育について、コーナー保育にどのようなねらいを設定し、どのように環境を構成し、幼児の主体的な育ちを支えていこうとするのかを今後も継続して検討することから、幼児の主体性を育む保育方法に関する研究知見の蓄積につなげていきたい。

## 注

- (1) ここで述べているA園の状況は、園長への聞き取りや公開保育の参観、同参観時の配布資料などをもとにまとめている。A園において、コーナー保育に取り組むきっかけの1つとして、コーナー保育を実践し子どもの主体性を育てている他園の保育を参観したことがあげられた。
- (2) 年度当初から各保育者がコーナー保育について明確な共通認識をもって取り組みが進められてきたわけではなく、年度を通して試行錯誤しながら取り組まれてきたことから、学年や時期によってコーナーで遊ぶ時間の設定などには違いはあるものの、園全体としてコーナー保育に取り組むという方針は共有されている。
- (3) 主として前者の「居場所」を意味するとしたのは、例えば、友達とけんかをした幼児がその場を離れ、自分の気持ちを立て直すために他のコーナーと区切られた絵本コーナーで一定時間過ごす、という場合も想定され、この意味では「逃げ場としての『居場所』」機能をコーナー保育が果たしうるとも考えられたためである。しかし、教育要領解説での意味や後述する自由記述の回答結果からも、コーナー

保育と関連の強い「居場所」は「自立していく場としての『居場所』」であると考えられ、以下その意味で使用する。

#### 引用文献

- 1) 渡辺英則, 2014, 「理論と実践をつなぐ真の制度とは」, 発達, 138, pp.10-16, ミネルヴァ書房
- 2) 大豆生田啓友, 2014, 「保育の『真』と今日的課題－倉橋惣三の保育論から考える」, 発達, 138, pp.41-47, ミネルヴァ書房
- 3) 日本保育学会課題研究委員会, 2014, 「遊びの質をどう捉えるか」, 保育学研究, 52(3), pp.105-118
- 4) 秋田喜代美, 2013, 「総論 保育者の専門性の探求」, 発達, 134, pp.14-21, ミネルヴァ書房
- 5) 文部科学省, 2008, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館
- 6) 厚生労働省, 2008, 『保育所保育指針解説書』, フレーベル館
- 7) 内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2015, 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』, フレーベル館
- 8) 三谷大紀, 2014, 「『乳幼児期における教育』の独自性を考える」, 発達, 134, pp.17-22, ミネルヴァ書房
- 9) 梅田優子, 2013, 「コーナー保育」, 森上史朗・柏女壺峰編『保育用語辞典 第7版』, p.111, ミネルヴァ書房
- 10) 友定啓子, 2009, 「幼稚園教育要領の改訂のポイント 領域・人間関係」, 無藤隆・柴崎正行編『新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて (別冊発達29)』, pp.53-59, ミネルヴァ書房
- 11) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 2010, 『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について』  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf)  
(2015/3/31access)
- 12) 安齊智子, 2003, 「『居場所』概念の変遷」, 発達, 96, pp.33-37, ミネルヴァ書房
- 13) 小川博久, 2010, 『遊び保育論』, 萌文書林

#### 謝辞

調査にご協力いただきましたA認定こども園の園長先生をはじめ、教職員の皆様方に心より御礼申し上げます。